

乃美宗勝ら立花残留衆を湊まで送り届けたと諸書に記述している。

十月二十日、毛利元就は、吉川元春・福原貞俊を長府から出立させ、長門有穂、周防白松北南・木波・床波・山代五か村一揆などを鎮圧する一方、山口の大内輝弘討伐を命じた（『舟越文書』萩藩閩閩録）。

山口築山の太内輝弘は、対岸の鴻ノ峯に敵兵が続々と入城しており、毛利本隊が山口へ進撃してくるといふ噂におびえ、豊後への撤兵を決し、右田岳下を通り、敵軍の追撃を退けながら、糸柙峠いとろを越え、合尾浦へ出たが、豊後水軍は撤退していて影がなく、船を求めて三田尻へ移動したが、仕方なく、富海とのみの茶臼山に登って船便を待つことにした。

しかし、大軍の包囲・攻撃を受けて、ついに切腹し、同行した豊前・豊後の将兵数百人も、皆討伐された。ときに大内輝弘は五十一歳であった。

### 三 大友氏の衰退

高橋鑑種、大友 太宰府背後の宝満岳城には、高橋鑑種加勢のために、阿曾沼広秀ら防長の兵二〇〇〇ほどを和陸し小倉へ、どを送り込んでいた（『赤川文書』）が、立花城を開城し、香春岳城・松山城も放棄されたため、孤立無援の状態となった。ここに、大友方の旧知の人の斡旋によって和睦し、高橋鑑種は豊前小倉へ移り、入道して宗仙と称した。

これより前、永祿十二年（一五六九）八月、毛利氏は、高橋鑑種へ誓紙を送っており、宝満岳下城の交渉

は、この起請文の線に沿って行われたと考えられる。次にその史料を掲げて、彼の位置付けを考えてみよう。

(端裏書) 「高橋へ一通也」

今度、大友と確執の儀につきて、上意に従い和睦致すべきの由、仰せ

出さるるに依り、御方に対し、此方存分の事、条々をもって申さしめ候

一 かくの如く和平を致し候といえども、貴所に対し申し、末代において見放し申すまじき事

一 万一、向後、大友と深甚の知音の儀候といえども、鑑種御事、彼下へ御入候へと申すべからず

候、此方与力として尽未来の際をかぎり、拘え置き申すべき事、

付、御方・此方半の自然雑説も候はん時は、この神文をもつて、直に尋ねに預かるべき事

一 所帯の儀、書き立てをもつて申し合せ候辻、いささかも相違あるべからざる事

右の条々、偽るにおいては、梵天帝釈四天王惣日本国中大小神祇殊に八幡大菩薩、嚴島両大明神、氏神祇園牛頭天王・天満大自在天神御罰を罷り蒙るべき者也、よつて起請文、件の如し

永禄十二年八月五日

右馬頭元就

小早川隆景

吉川 元春

毛利 輝元

高橋(裏書)三河守殿

(原文は漢文、『毛利家文書』)



高橋鑑種の花押

『大友興廢記』には、大友家老中の計らいで、立花城督吉弘鑑理の二男弥七郎を高橋鑑種の養子となし、岩屋・宝満岳両城を継がせ、鑑種には豊前国において二郡を宛行つたとある（『大友家文書録』・『九州治乱記』は企救一郡を宛行つたと記す）。

『市川文書』（萩藩閩閩録）四月八日付には、「門司衆の儀二付て、続目の判の事申され候処、其心を得候辻に於ては忘却無く候、去りながら、只今、判共遣わし候はば、高橋への聞へ如何に候条、先ずもつて此節は遣わさず候」と、門司の人たちが、所領の安堵を請うているけれど、高橋宗仙と対立することを避けたいので、当分、安堵状は出さないと述べている。この後のことであろうか、「門司城江豊後衆・高橋申談、取懸候之由申候、左様候共、珍事ハ御座有間敷と存候」（『南方文書』萩藩閩閩録卷四七）と、高橋宗仙と豊後衆が門司城へ攻め寄せるような豊後・高橋の友好関係があり、京都へお礼のため、段銭を徴収するから古帳の員数に任せ取り立てるよう、大友家加判衆から宗仙が命令を受けている（『田原文書』三月三日付）。一方では、「内藤隆春、種々御入魂の次第、かたじけなくとも忝共 御頼敷共、更にもつて兎角申し述べがたく候、いよいよもつて然るべき様御心得に預るべき事、頼み存じ候」（『内藤文書』二月七日付）と、長門国守護役内藤隆春と、高橋宗仙は、宝満岳籠城以来の親密な関係を保っていた。

下口の戦争を打ち切った毛利氏は、北口の尼子勝久を擁する山中鹿之助討伐に全力を注ぎ、伯耆・備前・播磨へと軍を進めたから、尼子勝久は織田信長に支援を仰ぎ、上口の戦争へと連続することになる。豊後の大友氏も織田信長と連携して毛利氏を牽制し、豊筑の経営を安定させることができた。毛利氏は薩摩の島津氏と連携して豊後を脅かした。

肥前では、竜造寺隆信が叛服を繰り返して、その度に、次第次第に勢力を強め、肥前一国から筑後を脅かすようになった。

### 大友氏の日向 侵略と大敗

天正六年（一五七八）、大友氏は日向に侵攻した。日向では、豊後国境の土持親成が、南部の伊東氏に圧迫されて島津氏と結び、伊東義祐・義益父子を豊後へ亡命させた。そのため、大友氏が豊筑の兵四万余を動員して日向へ送り込んだ。これに対して、島津義久が土持氏に援軍を送ったため、豊薩の大戦争となった。大友宗麟は務志賀（延岡市）まで出張し、この地にキリスト教の理想国家を建設しようとした。

日向方面軍を指揮したのは、六人の加判衆のうち、田原近江守親賢（入道紹忍）・佐伯紀伊守惟教（入道宗天）・田北相模守鎮周・吉岡越中守鑑興の四人、肥後から薩摩に侵入する作戦に当たったのは、志賀安房守親守（入道道輝）・朽網三河守鑑康（入道宗歴）の二人を中心とする南郡衆であった。

天正六年十一月十二日、日向耳川を渡って、島津家久・山田新介有信らの籠城する高城を攻めるとき、強引な作戦が裏目となって大敗し、敗走する過程で、数千人を討たれる惨敗を喫した。

豊後勢は、佐伯宗天・田北鎮周・吉岡鎮興の三加判衆をはじめとして歴々の武将を戦死させ、大友国家崩壊の口火を切ることとなった。

四加判衆のうち、重傷を負いながらも、ただ一人生還した田原紹忍に対し、敗戦の責任を問う声が殺到し、後世に悪名を残すこととなった。

田原紹忍は武蔵田原家を継いでいたが、奈多八幡の大宮司宇佐鑑基の子息で、姉が大友宗麟の正室となっ

ていたこともあって、寵臣として、大友宗麟に重く用いられていた。また宇佐郡妙見岳城督として、二〇年間余も豊前全域にらみをかかせており、豊前の軍勢を率いて、高城の戦いに参加していた。田原紹忍は、俗書では、大友家没落の原因を作った佞臣<sup>びやうじん</sup>であり、宗麟と同様、キリシタンで、神社仏閣を破壊したと記されているが誤りである。彼は神主の子であるため、姉とともに、強固な反キリスト教徒であり、養子親虎の入信に反対して追放した話は有名である。

また、薩摩側の記録では、豊後勢でただ一人勇敢に戦った武将として書き留められている。

大友宗麟が数万の家来を置き去りにするようにして、陸路で臼杵城へ逃げ帰り、しばらく行方不明であった田原紹忍が重傷を負って妙見岳へ帰着するありさまであったから、豊前から従軍した将兵が、島津勢に追撃され、討ち取られながら敗走する様を思い浮かべると、いかに困難な退却であったかが分かる。

豊後勢敗北の報は、たちまちのうちに、九州内外に流れ、立花城攻防戦以後、隠忍自重してきた豊筑の諸軍人は、好機到来とばかり、直ちに行動を開始した。筑前の秋月種実は豊前田川郡に侵入し、小倉城の高橋鑑種入道宗仙も、京都・仲津郡へ進出し、長野助守を離反させた。

このような時期に、養島の戦いがあった。

### 養島の戦い

天正七年（一五七九）正月、防州から渡海した杉七郎重良が養島に籠城した。杉重良は、豊前守護代であった杉伯耆守重輔の子で、父重輔が内藤隆世に反逆の廉<sup>かど</sup>で滅ぼされたとき四歳であった。永禄五年（一五六二）の大友勢の荻田松山城攻撃に籠城して、幼年ながら、天野隆重・杉隆哉らと踏ん張り、二郡を与えられたという（『伊香賀文書』萩藩関閩録）。この二郡が京都・仲津両郡か、田川郡が入

るのかは明らかでない。この二郡を長野助守・高橋鑑種が大友氏から与えられていたが、日向高城の敗戦で、彼らが相次いで離反した。秋月種実も、天正七年正月五日以前、「芸州御一味」を申し入れていた。益田藤兼は「杉重良の事、我等別して申し談じ、先年の筋目をもって御入魂肝要に候」(『杉文書』萩藩閩閩録巻七九)と秋月種実へ申し入れた。正月十八日、毛利輝元は、杉松千代丸(重良の子息元良)へ、「今度、親父重良こと、蓑島に至り渡海せしめ、敵心し候、是非に及ばず候、然る上は、一家断絶勿論に候といえども、母儀の覚悟をもって、同心無きの段、神妙の至りに候、それにつき、貞俊(福徳)、重畳佗言候条、彼の親子に対し、分別せしめ候」という書状を与えている。

この書状の意味は、杉重良が毛利氏に敵対して蓑島へ渡ったから、家名断絶が当然であるが、母と福原貞俊の陳情によって、杉元良が家を相続するのを許すというものである。この史料から、杉重良の行動を毛利氏が黙認していたのではないかという印象を受ける。

『大友興廢記』には、この事件について次のように述べている。

杉七郎重吉は毛利家に背き、豊後大友宗麟の家臣田原親賢入道紹忍を頼み、豊後に亡命しようと、手勢二〇〇人に雑兵あわせて二〇〇〇余人で渡海し、途中、蓑島に船をつけて休息した。ところが、大友氏と対立していた高橋鑑種が、杉重吉を豊後に入れさせまいと、六〇〇〇余人を率いて蓑島へ押し寄せ、何度か合戦の末、杉重吉の船を少々焼き払った。杉重吉は残った船で椎田に渡るだろうと予想した高橋宗仙は郡下こみち総守某に七〇〇人ばかりを付けて待ち伏せしていたところ、案の定、椎田に上陸してきた



長野助守の花押

ので、これを付け送って疲れさせ、ついに、杉重吉以下三五〇人ばかりを切腹に至らしめた。時に天正七年三月三日のことであった。高橋宗仙もこの一カ月後に病死した。

『大友文書録』には、右の記事の誤りを指摘する史料を掲げている。これを左に紹介して、事件の真相を探ってみよう。

蓑島に至り、宗亀（田原親忠）人数差渡され、杉重良と申し合わされ、前廿八、大橋表（二見）において、勝利を得らるの由、承り候、各軍（各軍の）勞の次第、申すに及ばず候、然る処、高橋・長野（宗仙）（助守）申し組み、右嶋取詰めるにより、毎日防戦を遂げ、敵数百人打果し候刻、宗亀家中の余義なき衆戦死の様、其聞え候、まこと忠儀高名比類無く候、然りといえども、遠聞計り難く候の条、然との到来承りたく存じ候、たとえ一旦、右の姿候とも、弓（きゅう）・箭（や）の慣ひ、珍しからず候の間、仰天には及ばず候、こゝもと出勢の事、義（大友）統堅く申し付け候由候、弥（いよいよ）油断有るべからざるの段、申し達すべく候、万一、蓑嶋表仕合（仕合）無く候はば、秋月事、還つて宗亀え入魂の義もこれ有るべく候か、その故は、種実、無思慮深重に候とも、宗亀氣仕いに及ぶにおいては、種実内儀としては嘆息（心悲）有べく候や、調略以下も折目をもって成就候事、新しからず候の条、差置かれず、その心懸專一に候、はた又、今度の行（てんた）につきて、ヶ条ならび方々書状、具に承知せしめ候、（以下略）

三月七日（天正七）

田原常陸（宗龜）入道殿

田原常陸（大友宗仙）（朱印）  
（『田原文書』、原文は漢文）

この史料によると、武藏田原紹忍（重傷加療中カ）ではなく、田原本家の親宏入道宗亀が、杉重良と示し合

わせて、蓑島へ兵を送って、高橋宗仙・長野助守勢と交戦し、大橋の戦いでは勝利を収めたが、蓑島を攻められて大敗し、田原宗龜家中の中心的な人物を多数戦死させてしまった。大友宗麟は田原宗龜の大友家に対する忠義と戦功をたたえ、戦いに勝敗はつきものであるから、敗北しても気落ちすることはない。豊後本軍の支援を義統が命じたから、油断なく籠城を続けるようにと励ました。

宗麟はまた、蓑島の合戦がなかったならば、宗龜と秋月種実とが、より親密な間柄になっていたのではなからうか、秋月種実の無分別がひどくとも、宗龜の諫めによって、慎重に行動するようになるのではなからうか、大友国家のために、豊前方面の調略を続けてもらいたいと述べている。

田原宗龜は、娘を秋月種実に嫁がせており、種実の弟長野種信の子を婿に取って、田原親貫ちかつかと称させ、家督を継がせていた。こうした関係から、大友宗麟は、田原宗龜の動きを心配していたのである。

田原宗龜は、前年十一月の日向高城の戦いに、養子親貫を出陣させ、自身は豊前方面へのらみとして、国元にとどまっていたようである。

高城の敗戦で、加判衆三人を戦死させ、生還した田原紹忍も重傷を負っていたから、大友「国家」は加判衆の補充のため、田原宗龜を府内に呼び寄せ、その任に当たらせた。ところが、田原宗龜は、一か月も経ないうちに黙って帰郷してしまった。領主の許可もなしに家臣が帰郷するということは謀反を意味する。府内は騒然となった。衰えていたとはいえ、田原氏は大友三分家の第一に位置付けられており、弱り目の大友氏に与えた衝撃は大きかった。臼杵城に隠居

宗龜

田原宗龜の花押



していた大友宗麟は、使者を国東に派遣し、田原宗龜の意向を質した。

田原宗龜の要求は、父親述、兄親董、宗龜と三代五〇年にわたって、大友家の勘気を被り、大内家で亡命生活を送っている間に、国東・安岐両郷を中心とする旧領を奪われ、分家の武蔵田原家や大友家臣団に与えられていたのを返還してほしいというものであった。

大友宗麟は二つの条件をつけて、宗龜の要求を入れた。一つは、宗龜の養子を廢嫡して、宗麟の子で林家を継いでいる新九郎親家を養嗣子として迎えること、もう一つは、大友家に対する忠誠の証しとして、一てだてを企てるというものであった。

田原宗龜は、この条件を飲み、杉重良に、永祿年間の旧領京都・仲津（田川カ）二郡を与えると誘い、両郡奪回のため、蓑島へ軍勢を送ったものと考えられる。しかし、このてだては失敗し、田原宗龜も、この年九月十六日病死した。

#### 四 高橋元種の台頭

元種、長野助守  
らを勢力下に

天正七年（一五七九）四月、小倉城の高橋鑑種入道宗仙が病死した。そのあとを秋月種実の子息（種実の弟という説もあるが、『黒田家譜』の説をとる）九郎元種が継ぎ、田川郡に侵

入して、岩石城・香春岳城に拠った秋月種実と連携して、京都・仲津二郡を与えられていた長野三河守助守を従え、築城郡の城井鎮房をも圧迫して、その勢力下に入れていく。